

《ちょっと一言》(2024年11月28日)

フィンランド国民を彷彿させるウクライナ国民の奮闘

高井 晋

ロシア・ウクライナ戦争は、ロシアによる一方的な軍事侵攻の日から1000日以上が経過した。この間、ウクライナ国民は、圧倒的な軍事大国のロシア軍に対して、不屈な抵抗を続けている。

ロシアの勝手な理屈で侵略されたウクライナ国民の必死の抵抗は、やはり当時の軍事大国だったソ連による軍事侵略に抵抗した、フィンランド国民の不屈な闘志と戦闘意欲を彷彿させる。

第2次世界大戦前の軍事大国ソ連は、エストニア、ラトビア、リトアニア、ポーランドなど近隣諸国を自国防衛のためと称して次々と武力侵攻を繰り返していた。

ソ連は、1939年11月30日、フィンランドに国境地帯の領土割譲と基地提供を要求してきたが拒否されたため、フィンランド領内へ軍事侵攻を行った。

軍事小国のフィンランドは、まともな重火器を持たず、少数の野砲と航空機等の装備があるだけでそがあるだけで劣勢は明らかで、世界はフィンランドの滅亡が時間の問題であるとみていた。しかし、愛国心に燃え不屈の魂をもったフィンランド人の少数の戦闘機部隊は、圧倒的なソ連機を次々と撃墜し、森林を庭とするスキー歩兵達は、火炎瓶と軽火器だけで重戦車すら撃破した。

この「冬戦争」と呼ばれる抵抗戦の結果、1940年3月、フィンランドは、カレリア地方などをソ連に割譲することを認め、軍事大国ソ連との講和に成功した。

その後、ソ連の脅威下にあったフィンランドは、1941年の独ソ開戦に呼応して6月25日にドイツ側に立って参戦し、「継続戦争」が始まった。フィンランド軍は、ドイツからの供与されたBf.109戦闘機や突撃砲に加えて、「冬戦争」でソ連から捕獲した多数の兵器で強化されてはいたが、ソ連軍は、大量の重戦車と航空機でフィンランド軍の防御線だった東部森林地帯を簡単に突破した。

しかし、このソ連軍の侵攻を食い止めたのは、やはり森林を庭とする歩兵部隊だった。カレリア戦線ではソ連軍が大規模な砲撃と爆撃機による大攻勢を展開したがフィンランド軍は何とか踏みとどまり、1944年9月、ドイツ側から離脱することを条件にソ連と和平が成立し、カレリア地方の割譲と賠償金をソ連に対して認めた。

フィンランドは、6万5千の戦死者を出したが、遂にはその侵攻を頓挫させ、フィンランド国家の独立存続に成功したのだった。

ウクライナは、果たしてロシア軍の侵攻を阻止し、国家として存続できるのだろうか。